

大宮見沼

特集

誰もがよりよく暮らせる街を
五反田会館の「ふるさと」づくり

よみさんぽ

第22号

やどかりの里発！

地域発見マガジン

写真家 野口勝宏

特集

誰もがよりよく暮らせる街を

五反田会館の「ふるさと」づくり

さいたま市見沼区南中丸五反田地区の住宅地の一角にある、「さいたま市立五反田会館（以下、五反田会館）」。看板を見逃すと通り過ぎてしまうのではと思わせるほど、周囲の住宅になじんだ佇まいです。今回は、5代目館長の三澤仁生さん、4代目館長で現指導員の有賀勝さん、前指導員で現協力員ふるかわの古河邦子さんの3人にお話を伺いました。

五反田会館って？

五反田会館は、人権が尊重される差別のない、明るい地域社会づくりを目指して、1987（昭和62）年に設立されました。地域住民の交流の場、さまざまな人権問題の学習の場として、また人権教育・啓発を推進していくための学習施設として、さまざまな事業に取り組んでいます。

具体的には、人権講座（年2回）、文化祭（年1回）をはじめ、会館が独自に行う24事業、さまざまなサークル活動を行っています。独自事業には、歌うことを通して心を豊かにする「歌のひろば」、健康な体づくりを目指す「健康体操」、子育て中のお母さん同士の交流を図る「親子ひろば」などがあり、これらの事業は、申込開始からすぐ満員になってしまうものもあるほど人気です。また、五反田会館



左から三澤さん、古河さん、有賀さん

で活動する団体は53団体（平成29年4月1日現在）。昨年度の年間利用者は約18,000人で、2歳～90歳代までの幅広い年齢層の人たちが利用しているそうです。玄関脇にはたくさんの本が並び、子どもからお年寄りまでふらっと立ち寄れる雰囲気醸し出しています。

顔の見える関係性が築かれて

さいたま市には、隣保館が1か所、五反田会館のような同和教育集会所が2か所あります。この、隣保館や集会所というのは、人権を大切にする場、楽しい語らいの場として設置され、今では、地域の憩いの場ともなっています。

五反田会館も、「人権意識啓発の場所」、地域の「誰もが集まれる場所」として活動を続けてきました。以前は、使う時に利用者がカギを開けていましたが、17年前に今の建物に改築したことを機に、職員が常駐し、いつでも開いている場所になりました。県内でも職員が常駐している集会所はさいたま市だけだそうです。地域のサークル・グループの活動場所として活用する団体も増えてきました。定期的に利用してもらう中で、職員と利用者の上に顔の見える関係性が自然と築かれていったのです。

互いを知り合うことから

五反田会館ができた30年前、埼玉の各地には部落差別が根強くありました。今でこそ、あからさまな差別は感じられなくなっていますが、実際にはまだ残っています。同和地区と言われていた地域の、ある施設でのことです。初めて見る男性に職員が話しかけると、その人は最近東京から引っ越してきたとのこと。近所の人に「ここが同和地区だと知って引っ越してきたのか？」と聞かれたそうです。その人は今の時代にそんなことを言う人がいるのが信じられなかったと笑っていました。昔に比べればずいぶん変わりましたが、まだ各地に差別が根強く残っているの



五反田会館外観

が現実です。

五反田会館では、主要事業として人権講演会を年2回開いています。「誰もがこの街で楽しくみんなで暮らす」ために、五反田会館として何ができるのか、必要なのかを考え、意見交換しながら企画してきたそうです。例えば、五反田会館の周辺にも外国人の方が多く住むようになっています。その人たちはどんな暮らしをしているのかと思い、実際に外国の方に来ていただいて、自分の国の話と合わせて、日本に暮らして困ったこと、こうして欲しいと感じることなどを話してもらいました。やどかりの里との出会いも、精神障害のある人の話を聞きたいと、当事者に来てもらったことがきっかけでした。また、性同一性障害に関する講演会を企画した時も、実際に当事者の話を聞くことで、より人権について身近に考える機会になりました。最初は「そういうのはやらなくても……」と言っていた人たちも、継続的に開催していく中で、少しずつ「そういうこともあるのか……」と聞いてくれるようになっていったそうです。他にも、東日本大震災の被害にあった岩手県大船渡市の人を招いて講演してもらって、それ以降大船渡との交流と支援は続いています。

このように、五反田会館の講演会では、さまざまな人権課題に関わる当事者に話してもらうことを大切にしています。当事者とふれあい、生の声を聴くことは、当事者を知る、知り合うことにつながります。そのことで、今まで自分とは関係ないと思っていたことも、特別なことではなく身近な問題として考えられるようになるのだと思います。

人権講演会だけでなく、文化祭などの事業を通して、今まで知り合うことなかった人たちが出会い、交流しながら、時間をかけて理解し合っていることを感じます。そのことが差別のない地域、社会につながっていくのではないのでしょうか。「五反田会館で働く私たちも、最初は何も知りませんでした。さまざまな皆さんに出会い、知り合う中で教えられているんです。利用者も私たちもいっしょです」と有賀さんは語ってくれました。

これから

館長の三澤さん、4代目館長で現指導員の有賀さんは、小学校の校長を務められていました。そんなつながりもあってか、地元の小中学校との関係も良好で、共催事業などにも取り組み、子どもたちへの働きかけも意識的に行ってい

ます。夏休みなどは、図書スペースで宿題する子どもたちもいるそうです。

今年4月に五反田会館に赴任された三澤さんは「今までは子どもたちとのかかわりが主でしたが、ここでは地域の人と触れ合う機会が多くあり、新鮮な気持ちで仕事をしています。地域の人に『行きたい』と思ってもらえるような『行き場所』になるよう、明るく、安全で、清潔な施設を心がけていきたい」、有賀さんも「ただ単に生まれ育った場所ということだけでなく、楽しい思い出をつくれる『ふるさと』づくりをしていきたい」と話されます。17年間、地域住民の立場で指導員となり、五反田会館と住民の橋渡しをしてきた古河さんも「楽しみながら、無理をせず、楽しいことを考えていけたら」と語ってくれました。

つながりがつくる地域の輪

「人権は守りましょう」「差別はいけません」と言われても、目に見えない権利や差別を実感できるまでには何らかのきっかけが必要です。そんなきっかけとなる場と機会を提供している五反田会館は、設立から30年で多くの人や団体をつなげてきました。

やどかりの里も地域とつなげていただいた団体の1つです。五反田会館での文化祭に参加することを通して、地域の人たちと触れ合い、精神障害のある人のことを知ってもらう機会ともなっています。精神障害のある人のことを知ってくださいということではなく、文化祭をいっしょに楽しむことで理解が広がっているように感じています。自然な人と人とのつながりの輪の拡がり、誰もが暮らしやすい地域、「ふるさと」をつくっていくのだということを改めて確認させていただきました。

私もこの地域に暮らす1人として、五反田会館を利用しています。誰でも受け入れてくれる温かい雰囲気を感じながら、この場所でこれからもこの街の「ふるさと」を育む1人でありたいと感じる時間でした。（記 宗野 文）



子ども造形広場の様子

さいたまの匠

確かな技術と熱意を込めて

戸塚 健一さん

(革工房クラムジーライフ代表・革職人)



戸塚 健一さん

見沼区大谷の住宅街にある、ハンドメイドにこだわった「革工房クラムジーライフ」。年代もののハーレーダビッドソンとロングホーンに出迎えられて工房を訪れると、工具や革製品、代表の戸塚健一さんが好きなバイク関連のアイテムがディスプレイされ、個性的で素敵な空間が広がっていました。

革工房を立ち上げるまで

代表の戸塚さんは山形県酒田市で産声をあげ、旧浦和市で育ちました。お母様が編み物の先生だったことや、親族に洋画家、漫画家、家具職人がいる環境で育ち、物心つく前からものづくりに触れてきました。戸塚さん自身も学生時代にアンティークショップや古着屋を巡り、購入した古い鞆や革ジャケットを自分で直して使ったり、バイク用のバッグやシートを革で自作したこともあったそうです。ヴィンテージバイクショップの独立開業を夢見て、大学在学中より都内のバイク店でメカニックの修行を始め、国家整備士免許も取得。その後家庭内のトラブルでシングルファーザーとなり、子育て中心の生活をするため、複数のアルバイトを経て在宅仕事の環境を求め、革工房を立ち上げました。

2005年4月、桜区で始まった革職人生活は順調ではありませんでした。オープン当初はほとんど仕事がなく、やっとオーダーを頂いても革を仕入れるお金がなくて、お客様に頭を下げて前払いしてもらったこともあったそうです。その後、お客として知り合った現在の奥様が身の回りや子どもの世話をしてくれるようになったことが転機となり、2007年4月に現在の工房へ移転しました。

プロの信念をもって仕事に向き合う

戸塚さんには技術を学んだ特定の師匠はおらず、海外の教本を取り寄せて勉

強したり、市販のバッグを分解・組み立てて構造を研究したり、同業の先輩から教えてもらったりと独学で技術を習得。何よりお客様が持ち込む無理難題のオーダーに応えることで、スキルを上げてきました。クラムジーライフではバイクに関する革製品以外にも、財布、カードケース、ベルトなど一般革製品もフルオーダーで作っています。革製品の修理も受けており、県外のお客様や同業者からも多数オーダーが入るようになりました。お客様の要望やコンディションは様々で、困難な注文もあります。「自分の都合だけで考えれば、作りやすいものしか作らなくなるので技術的なハードルは下がります。ですが、プロである以上、受けたものは断りたくない。出来ない、知らないとは言いたくない」との信念で、技術を上げるチャンスと1つ1つの要望と向き合っています。

レザークラフト本の執筆の他、著名人やプロスポーツ選手、有名ショップからのオーダーに応える戸塚さん。作品への強いこだわりの1つが、量産品にはないハンドメイドのテイスト。作品を手にとると、革のつややかさと厚み、革の切り口の処理の仕方、縫い糸の太さが量産品とは全く異なります。製作に手間はかかりますが、耐久性に優れたハンドメイド製品。その「こだわりと価値をお客様に理解してもらう努力もハンドメイド作家には必要」と話されます。

現在、戸塚さんはすてあーず（南中野で革製品を製造・販売する事業所）でレザークラフトの技術指導をして下さっています。プロとしてのこだわりや技術の高さはもちろん、気さくでユーモアのあるお人柄に誰もが魅了されてしまうでしょう。技術のベースができた今、オーダー品だけではなく自分の好きなスタイルのオリジナル製品作りもしたいと語ります。情熱とこだわりのハンドメイド作品がこれからも生み出されていくのでしょうか。（記 堤 若菜）



あの街 この街 俊一郎が行く・16

遠景の中の風景

卒煙報告

こんにちは！ 最近、煙草をやめました。薬を服用しながらの禁煙でした。意外とつらくはありませんでしたが、成人した頃からの習慣を脱することへの拒否反応なのか、薬の副作用か、明け方に毎日見る悪い夢には困りました。煙草を手にしなくなって3か月、つらいと感じることはありませんが、ぼーっと煙草を吸いながら景色を眺める時間をもたなくなったことは少し寂しいです。

北向きのベランダ

煙草をやめるまで、自宅ではベランダで吸っていました。運河に面した自宅の、ベランダからの景色はひらけていて、飽きることがありません。若葉がみずみずしい春を過ぎると分厚い雲のせめぎあいと太陽のきらめきに、梅雨から本格的な夏への変化を感じ、運河で夕立の雨粒が川面で踊る様子を見ます。運河は生き物も豊富で、川鵜に追われて逃げるボラの稚魚の群れがキラキラと輝いたり、運がいいとカワセミもやってきます。気まぐれでゆっくりとこれらの変化を楽しむには、煙草を吸う時間の長さがちょうど良かったりするのです。



携帯カメラに写すいつもの景色

いつもの景色に変化が現れた時、ふと写真に収めたくになります。目にした印象通りに撮れると、宝物にしたいくらい嬉しい

とまつりしゅんいちろう
都祭俊一郎

1975年生まれ。生まれも育ちも、東京の下町。エンジュの新築の他、保育園や幼稚園の設計（新築及び改修）を複数行う。（写真 新 良太）



気持ちになるのです。しかし、狙って撮ろうと張り込むと、期待した風景は訪れません。東京下町の自宅前にカワセミが住んでいるという自慢話をしたくて、いつも撮影を試みますが、そういう時に限って携帯もカメラも手元になく、未だに撮影できないでいます。

定点撮影

ベランダで眺めた遠景を写真に収める一方、被写体の風景の中に入ってみると、何気ない風景をつくり出している様々な要素を知ることができます。

最近、身近な場所の都市景観について話し合う場に参加しています。下町の風情、公園の緑、川辺の潤い……と街から連想するイメージやキーワードは話し合いの中でも聞きますが、具体的にイメージをつくり出している根拠を求めていくと見つからないものです。いずれ見つけた時には紹介しようと思います。

景色を見るのか景色になるのか

煙草をやめた今、もっとも困っているのは、ベランダに出る機会が減ったことです。少なくとも、ぼーっとするためにベランダに出なくなったために、ますます景色を眺めたり、それを写真に収めたりすることがなくなりました。

煙草をやめる前は、街を歩いていても吸える場所が気になって落ち着かなかったけれど、今ではその煩わしさも感じなくなりました。景色を眺める時間が減ってしまった分、これからはその景色の中を歩き回ってみようと思います。



浦和活動支援センター

「ブックカフェ」20回を迎えて

精神障害がある人たちの日中の憩いの場所として、近隣在住の40数名が利用している浦和活動支援センター。2015（平成27）年9月から始まった読書会「ブックカフェ」が20回目を迎えました。

「ブックカフェ」は本を通じたコミュニケーション

浦和活動支援センターでは、月に1回、本が好きな仲間が集まる時間があります。読書会という少し堅苦しいので、「ブックカフェ」と呼んでお茶やお菓子をいただきながら、リラックスした楽しいひと時を過ごします。「最近こんな本を読んだけど、おもしろかったから誰かに話したいな」とか、「同じ本を読んだ人の感想を聞いてみたい」というおしゃべりの時間を定期的に設けているだけの気楽な会です。時には「今は本を読めてないけど、みんなの話を聞きたい」「これから何をを読んだらいいか、おもしろい本の情報を知りたい」ということもあるようです。そんな風に本を持たない人の参加も大歓迎です。参加者みんなで、本を通じたコミュニケーションの時間を楽しもうというのがこの集いの目的だからです。

本で自分を表現する ある日のブックカフェから

月に一度のブックカフェのある金曜日、午後2時前になると参加者が集まってきました。「飲み物何にする?」「お菓子の差し入れ持ってきたよ」お茶の支度をしながら、その間に本を紹介する順番を決めます。「ぼくは一番がいいです」と、みんながちょっと緊張するトップバッターを、いつも自主的に引き受けてくれる読書家のYさんからスタートです。今日は、好きな詩を1つ朗読してくれました。

順番に、持ってきた本の内容や、どうしてその本を読んだか、どんなところが気に入ったかなどを話します。ある人のお気に入りの絵本は、仲良しの家族の思い出とつながっていました。またある人は、好きな作品は何度も繰り返し

読んで、その時々を感じ方を味わうという読書スタイルです。美しい空の写真集を見せてくれたのは、絵で表現するのが得意な人。俳句を創る人は、日本の伝統や言葉の本から創作のヒントを得ているようです。憧れのサーフィンの雑誌を持ってきた人は、みんなから「そんな雑誌あるんだね」と驚かされていました。友情を描いた長編マンガの心を揺さぶる名シーンを熱っぽく表現してくれる人、図書館にもよく通うという読書家の先輩は、司馬遼太郎から経営論まで若い人に幅広く教えてくれます。内容の多様さは参加者の個性の現れで、一度として同じ本が重なることはありません。紹介する本からその人の人柄や関心事が感じられます。逆に意外な一面を発見することもあります。自分の知らない世界を知り、自分とは違う他人を知る場でもあります。

本から広がる世界

ブックカフェには、時々ゲストをお迎えしています。地域の人や、やどかりの里でさまざまな仕事に携わるスタッフが、本の話だけでなく、自分の人生や体験など新鮮な話題を提供してくれます。そんな日は質問もたくさん出て、いつにも増して賑やかです。本だけでなく、好きな映画の話をしたいというメンバーの提案で、「シネマカフェ」という集いも生まれました。ブックカフェをきっかけにさらにやりたいことが見つかる、そんな機会になれば、こんなに嬉しいことはありません。この先ももっと新しい展開がありそうです。

（記 山田 玲子）



本でつながる仲間たち

さいたま市図書館友の会北浦和支部の皆さん

北浦和図書館は、北浦和駅東口から徒歩5分、1974（昭和49）年築の建物がちょっと懐かしい雰囲気、人の温もりを感じる図書館です。ここで返却された本を棚に戻したり、傷んだ本を修理したりと、図書館を応援する活動を続けているのが図書館友の会です。北浦和支部はもっとも歴史が長く、来年25周年を迎えます。休館の月曜日、日頃の活動の様子などをお聞きしました。

私と「図書館友の会」

今年4月に新支部長に就任した高梨玲二さんは、友の会の歴史をよく知る1人。「私より前に入った先輩が、いつの間にか9人になっちゃって」、それでも「入会者が今もどんどん増えていて、仕事が足りないくらい」とのこと、現在は68名が在籍しているそうです。

本を棚に戻す排架作業をしていた井上誠さんは、支部では広報紙も担当しています。現役時代は教育委員会や公民館の仕事を長くされてきて、「退職後は少しでも地域にご恩返しをしたいと思います」。井上

さんは、高齢者の健康づくりのためのサロン活動にも取り組んでいます。

同じく、主に排架や広報を担当する深町千穂子さんは、「ボランティアをしたいと思った時、図書館がいちばん身近でした」と振り返ります。「私は変わり種かも。きっとここでは最年少ですね」。現役で働く世代の参加者が少ない中で貴重な存在です。

本の修理をしていた横須賀良夫さんが友の会に入会したきっかけは、約8年前に図書館主催の本の修理講座に出席したこと。「図書館に特別興味があったわけじゃないけど、修理がおもしろくなっちゃって」。手を動かすのが好きだったこともあり、今



支部長の高梨玲二さん

では修理に使うプレス機を自宅のまな板や廃材などで自作するほど。「最近は糸綴じの本が少なくて、ちょっと物足りないね」と横須賀さん。

美化活動のグループは、昔話などをテーマにした特大の切り絵作品を作って、図書館前の掲示板で来館者を楽しませています。子どもたちに物語の世界に入るきっかけを与えたい、という思いから始まり、メンバーは2か月に1回集まり、それぞれが分担した絵のパーツを持ち寄って1つの作品に仕上げます。大間知晋輔さんは、「各人のテイストが違って、材料などに工夫を凝らしているのがおもしろい。ここは自分が作ったとこだな」と、歴代作品の写真を見せてくれました。

かつては中学校の教師として図書室にも携わってきたという山本英二さんは、「本に関わることを続けていきたい」図書館のボランティアをすることにしました。本の修理は、



バラバラになった本を修理する

「ボロボロになった本がまた使えるようになるのが嬉しい」と優しい笑顔を見せます。美化活動にも参加していて、定年後にご自身で切り絵作品も作るようになったそうです。

本や図書館を通して拓がる世界

そんな、図書館友の会が総力を挙げて取り組むのが、毎年恒例の「古本バザール」です。図書館で使わなくなった本や、近隣の住民から寄贈された本を、必要な人に提供しています。やどかりの里のメンバーも何人か参加して、好きな作家や趣味の雑誌などを手に入れ、ブックカフェ（読書会）でも紹介していました。

他にも見学会や講演会の企画、読書会など、友の会の活動は多岐に渡ります。さまざまな経験や特技をもった人たちが図書館や本を通してつながり、化学変化を起こしながら、その世界はどんどん拓がっていくようです。（記 山田 玲子）



切り絵作品を振り返る美化活動メンバー

今年もこの季節がくる!
やどサリ[★]の里[★]
2017
大ハサ
10月8日(日)
10:00~15:00
雨天決行
中川自治会ふれあい広場

！開催するにあたって、以下2点を募集いたします！

バザー物品

服(大人・子供)、ベビー用品、おもちゃ、本、CD、DVD(新品・美品)、生活小物
食器、雑貨(新品・美品)、台所用品、タオル、洗剤、石けん、毛布、シーツなど
※食品は、缶詰、調味料など賞状期限の未開封で常温保管できるものに限り、
※家電、家具などの大型家具は、お受けできません。

＜募集期間＞ 9月1日(金)～ 9月30日(土)
＜集荷＞ サポートステーションヤドカリ TEL: 048-686-0494
〒337-0043 さいたま市見沼区中川1562 (FAX: 048-747-7030)
(集荷日: 月～土 9:00～18:00)

※品物は、上記の住所へ持参いただき、送り様負担の宅配便でお送り下さい。

ボランティア

バザー当日の運営に関わるボランティアを募集しています。
(9:00～16:00、衣類や雑貨、集荷の受付、警備などをお願いいたします)
＜お問い合わせ＞ サポートステーションヤドカリ(集荷日: 月～土 9:00～18:00)
＜受付＞ 9月30日(土)までにお申し込み下さい。
TEL: 048-680-1891～3 FAX: 048-680-1894

すべての人々が人間らしく豊かに育ちあえる地域づくりをすすめるために
こうぬまふくしかい

社会福祉法人 **鴻沼福祉会**

こころを込めた手づくりの品をぜひご賞味ください！

つばさ共同作業所・そめや共同作業所
いちず
とうふ屋 一豆
TEL 048-854-8000
FAX 048-854-3538
さいたま市中央区上峰2-10-20

つばさ共同作業所とそめや共同作業所が手がける、
国産・手づくりこだわった本格とうふ。
宮城県産高級大豆「ミヤギシロメ」を
100%使用しています。
大豆本来の濃厚な甘さとコクを味わえる
“小さなぜいたく”を食卓にお届けします。



きりしき共同作業所のパンは食の安全・安心に
こだわり、原材料に国産小麦粉を使用しています。
(一部商品を除く)
この道30年の職人とともに手がけるパンは、
少し懐かしい味と香りがします。

きりしき共同作業所
きりしきのパン

TEL 048-854-6910
FAX 048-854-6942
さいたま市中央区円阿弥1-3-15
鴻沼福祉会館内

そめや共同作業所

弁当屋 いちず

TEL・FAX 048-684-1257
さいたま市見沼区染谷2-145

弁当屋いちずのお弁当は、忙しい毎日を
過ごす方たちに1食でもバランスの良い
食事をしていただきたいと、
副菜や小さなおかずにも野菜をたっぷりど
使って作っています。



鴻沼福祉会から読者の皆様へ

鴻沼福祉会では、袋詰め・部品組み立て作業や清掃作業、
資源回収など、地域の企業様のニーズに応えるべく様々な
仕事を受注しています。
働くことをとおして障害のある人がさらに輝けるチャンスを求めて
新しい仕事にもチャレンジしつづけています。

障害のある人たちの就労支援、生活支援、
相談支援のスタッフを募集しています！
お問い合わせ先：048-854-6890 (担当オガワ)

鴻沼福祉会事業所一覧

- 本部・事務局 埼玉県さいたま市中央区円阿弥1-3-15 鴻沼福祉会館内 TEL: 048-854-6890 FAX: 048-856-0313
- 《はたらく》●つばさ共同作業所(中央区) ●あざみ共同作業所(見沼区) ●そめや共同作業所(見沼区) ●きりしき共同作業所(中央区)
- さいたま障害者労働センター(桶川市)
- 《くらす》●第1たかさご荘 ●第2たかさご荘 ●第3たかさご荘 ●かえてホーム ●かりんホーム ●よつぱりハウス
- なつめホーム(以上、中央区) ●のぞみホーム(見沼区)
- 《ささえあう》●中央区障害者生活支援センター来夢 ●地域活動支援センター来夢(以上、中央区)
- 見沼区障害者生活支援センター来人(見沼区)

大宮見沼 よみさんぼ

作者紹介

写真家 野口勝宏さん

のぐちかつひろ／猪苗代町生まれ。写真家。東日本大震災を機に「福島の花の美しさで世界の人々を笑顔にしたい」と「福島の花 Flowers of Fukushima」シリーズを制作。全国各地での写真展開催のほか、病院や福祉施設などでの展示も手掛ける。また、2016年5月より国内就航を開始したANAの復興支援「東北 FLOWER JET」の機体を福島や東北の花々でデザイン。全国に明るさを届けたいと活動を続けている。

野口勝宏オフィシャルサイト

<http://noguchi.photo>

表紙：ヒマワリ

暑い季節に強烈な花で、朝から元気を出していただけるといいのですが、逆効果でしたら申し訳ない！ 向日葵、日輪草とも書きます。太陽を追いかけるといのは、若いつぼみの頃までの話のようです。朝、東を向いていたヒマワリは太陽を追いかけて西を向き、日没後また動き出して翌日の夜明け前までには再び東を向いているというのですから、とても真面目な学生さんのようです。勤勉ですね。花言葉は「あなたただけを見つめる」 ヒマワリならそうですね。

題字 宗野文さん

学生時代から書道が大好きで、子育て中の今、我が子とともに習字に再挑戦中。やどかりの里の作業所「すてあーず」所長。見沼区南中丸在住。

大宮見沼よみさんぼ 第22号

発行 2017年8月（夏春号）

編集 「大宮見沼よみさんぼ」編集委員会
〒337-0026 さいたま市見沼区染谷
1177-4

Tel 048-680-1891

Fax 048-680-1894

E-Mail johokan@yadokarinosato.org

<http://www.yadokarinosato.org/>

発行 公益社団法人やどかりの里
理事長 土橋敏孝

印刷所 やどかり印刷

公益社団法人やどかりの里は、この大宮見沼界隈で障害のある人たちとともに地域で生きることを目指して活動を続けています。私たちは長年この地域で活動し、地域の皆さんに支えていただけてきました。

そして、この地域の人々が織りなしてきた歴史・文化、守り育ててきた自然、地域に根づいた事業等々をもっと知りたいと思うようになりました。合わせて、やどかりの里のことも皆さんにもっともっと知っていただきたいと「大宮見沼よみさんぼ」を創刊いたしました。

「大宮見沼よみさんぼ」編集委員一同